

特集 70 年前から協同へのメッセージ

03

共同体の再建に貢献する協同組合へ

野尻武敏 (神戸大学名誉教授・コープこうべ協同学苑学苑長)

聞き手 加賀美 太記 (就実大学経営学部専任講師)



野尻武敏氏

インタビューにあたって

1945 年 8 月 15 日に始まった日本の戦後は、折に触れて、戦争から教訓を学びとろうとしてきた。そうした中で、戦中を過ごし、兵役を経験した人々の体験に基づく声が貴重な役割を果たしてきた。しかし、月日が経つにつれ、戦前・戦中の記憶を留める人々の多くが鬼籍に入りつつある。

とくに終戦から 70 年経った今年、国内だけでなく海外を含めた政治情勢が大きく揺れ動いており、改めて戦争を振り返り、平和について考えようという機運が高まっている。本誌においても戦争と平和について考える特集を設けることになったが、先の戦争の現実を知る方が少なくなっていることに、改めて気が付かされた。

残された時間において、戦争を知る世代から何かを学び取ろうと努力をすることが、戦後世代に課せられた役割ではないだろうか。本稿はその一環として、生協にもかわりの深い方にお話を伺いながら、改めて戦争と平和について考えてみることにした。

幸いにも、生活協同組合コープこうべ元理事長で、現在はコープこうべ協同学苑長を務める野尻武敏先生にインタビューをお引き受けいただくことができた。野尻先生は大正 13 年生まれで、太平洋戦争の初期を満州の建国大学で過ごし、学徒出陣にともなって海軍士官として従軍された経験をお持ちである。戦後は神戸大学で教鞭をとってこられた。今回、野尻先生には満州や海軍でのご自身の体験を振り返りながら、当時の社会の雰囲気やご自身の思い、さらには戦後社会のあり様についての考えや協同組合への期待を縦横に語っていただいた。本稿が、戦争と平和を再考する一助になれば幸いである。(加賀美)

【加賀美】 先生は 10 代後半で戦争を経験しておられますが、当時をどのように過ごされたのでしょうか。

【野尻】 ぼくの郷里は大分市内です。市内といっても農家が3分の1ほどで、おそらく全国平均に近い状況だったと思います。当時の義務教育は小学校だけで、それ以上に進むものは全体の1割ぐらい、あとは小学校を出たら働くのが普通でした。ありがたいことに、ぼくは旧制中学校に進みましたが、家の状況から考えて、旧制高等学校や大学まで親にねだるのは無理だとわかっていました。

そうした家庭の子供で勉強はできるといった少年たちの多くは、軍の学校を狙ったものです。それで、私も中学校に入ったときから海軍兵学校に行こうと考えていました。ところが、中学校の3年生のときに近眼になってしまいました。海軍兵学校の受験資格には1.0以上の視力が必要だったので、あきらめざるを得なくなったんです。

しかたなく、他に一銭もいらずに行ける学校はないかと調べました。陸軍士官学校の受験資格はありましたが、陸軍に行く気はなかった。ずいぶん悩んだ末、当時満州の首都だった新京（現在の長春）に創設された建国大学という学校に進むことにしました。いまから振り返ると、ぼくは17歳で満州に行ってやろうと決意し、戦争が始まった年に試験を受けたわけですね。

建国大学は日・鮮・満・蒙・露の五民族の学生が共に学ぶ全寮制の大学で、学費も寮費も全額国庫負担でした。内地の大学と同様、前・後期合わせて6年間の課程でしたが、満州に渡った翌年の昭和18年の暮れには学徒出陣が始まり、ぼくも翌年に軍隊に行くことになりました。もともと海軍が好きだったうえに、その頃には視力も問わなくなっていたこともあって、海軍を志願し、昭和19年の夏に満州を離れました。

満州での一番の親友は、ヴィクトル・イワノヴィッチ・リハチョフというロシア

人でした。彼一人が新京の駅でぼくを見送ってくれたのをよく覚えています。

それから一年程、三浦半島の久里浜に海軍対潜学校という、対潜水艦戦闘専門の学校があって、そこで訓練を受けました。そして昭和20年の6月1日、いよいよ海軍少尉になって、潜水艦と戦闘する駆逐艦が何かに乗るのだろうと思っていたら、「おまえは大阪へ行って、掃海をやれ」と言われました。

終戦の年ですから、すでに日本各地で空襲が始まっており、海も潜水艦との戦闘どころではありません。もう、大阪湾の入口の友ヶ島水道の向こうまでアメリカの潜水艦が来ており、瀬戸内海であれ、どこであれ、主要な港湾には機雷をボンボン落とし始めていたんです。磁気機雷、音響機雷、水圧機雷などの新式機雷です。そうした機雷を排除する掃海任務を命じられたわけです。

ところが、対潜訓練ばかりで掃海の訓練なんて1回も受けていないから、「どうやってやるんですか」と聞いたら、「そんなこと、自分で考えてやれ」と（笑）。そんな時代ですよ。

それで6月2日に大阪にやって来たのですが、ちょうど前日に大阪大空襲があったばかりで、大阪市内は丸焼けでした。港に至るまでほとんど建物はありません。鉄筋の建物と土蔵だけが残って、街路両側には死体が累々としているなかを歩いて港まで行きました。それから毎日、戦争が終わるまでの3カ月、徴用した小さな木造漁船の掃海艇で命懸けの掃海作業をやっていました。

そうして8月15日を迎えたのです。送別会で中国人やロシア人や蒙古人まで学友のみんなが日章旗に寄せ書きをして渡してくれたのですが、いまはもう持っていませ

ん。玉音放送を聞いた後、「何もかもが終わった」と思って、自分の持ち物を全部焼いてしまったんです。それがぼくにとっての戦争です。

【加賀美】 それでは戦後はどのように過ごされたのでしょうか。また協同組合とはどこで関わるようになったのでしょうか。

【野尻】 戦争は終わったのですが、うちの隊だけはアメリカから解散禁止命令が出て、家に帰ることができませんでした。それだけでなく隊員も増員されました。戦中に敷設した機雷があるため、アメリカの船舶が入れないからと、引き続き掃海をやらされたんです。しかも大阪湾だけでなく、播磨灘をこえて高松に至るまでの航路全域です。そのための基地が神戸に設けられたのですが、このおかげで神戸との関係ができました。

その頃、ぼくは掃海艇の副艇長をしていたのですが、解散禁止命令が出ているから家にも帰してもらえない。しかも、中学時代の同級生たちは復員して、どこどこに復学したという便りはくるけれど、ぼくは復員しても帰る大学がなかった。建国大学は満州でしたからね。だから、昼間は命懸けの仕事をやって、夜は飲んでばかりいました。

そうした日々が続くうちに、寂しくなつたんですね。「こんなことしていて、いいのかな。もう一回、どこか大学に入って、やらないかな」と思い始めて、昭和 21 年の秋に、神戸経済大学（現在の神戸大学）に入りました。経済学をやりたいからではなく、寂しさを紛らわせるために大学に行ったんです。

そういうわけなので、経済学をやりたい大学に入ったわけではないし、入学が決まってからも 1 年ほどは船に乗っていたう

え、その後も学費を稼ぐため働いてばかりでした。

ただ、そんな状況でもゼミは必修なのでどこかに入らないといけない。経済は好きではないし、テーマも銀行論とか貨幣論とかが並んでいて行きたいゼミがなかったんです。ところが、その中に思想史のゼミがあって、「これはいけるかも」と思い、そこを志望しようとしたのですが、担当教官の「五い百お旗き頭べ」という名字が読めない。事務室で「あの五百旗とかなんとかと書いてあるゼミに行きます」と言ったら、事務に「あんた、どこの学生？」と、ジロリとにらまれた記憶があります（笑）。そうした経緯で、大学では思想史を専攻しました。五百旗頭先生の専門は中世で、トマス・アクィナスの研究をされていたから、ぼくもそうした思想史を研究するようになりました。

その後、神戸大学にポストをいただき、残ることになったんですが、相変わらず寂しかったんですね。自分の好きなことをやってはいるけれど、周囲はマルクスやケインズなど、現在の経済学に影響を与えた人を研究している人々ばかり。中世のトマス・アクィナスをやっている人なんて、誰もいない。「こんなことをやっていて、いいのかな」と思っていました。

ただ、最初の論文を建国大学時代の先生に贈呈したところ、「おまえの論文を見てわかるやつは、いまの経済学界にはいないだろうが、あの先生なら、おまえの論文がわかるかもしれない」と言われました。あの先生というのは、元東大教授で、戦後は早稲田に移られた難波田春夫先生です。難波田先生は、ぼくが建国大学の頃に、わずか 30 代で公にされた『国家と経済』という名著で広く知られていた先生でした。そこでさっそく論文を差し上げたところ、本

当に感激したのですが、封筒が丸くなるくらい長い手紙が参りました。そこには、えらい励ましの言葉があって、「寂しいのはわかるが、若いときにはとにかく一所懸命やっておけ。それが結局、一番の基礎になるのだから」といった内容でした。

それを励みに、ぼくは経済社会思想史の専門家となりました。

こうして経済社会思想史関連の文献を読みあさっている間に、協同組合に関心を持ち始めました。

ただ、コープこうべに深入りしたのは、それとは直接関係ありません。コープこうべと関係を持つ前に、ぼくの社会思想はだいたい固まりつつありましたから。

【加賀美】 先生の社会思想と協同組合への関心とはどういうものなのでしょう。

【野尻】 近代は個人主義を背景にした資本主義的な経済から出発します。それに対立して、マルクス主義のような動きが起きました。マルクス主義は、個人主義というよりも、全体主義的、あるいは共同体主義的と言ってもいいかもしれない。第2次大戦後は、ソ連が力を持ってきて、中国もその方向に進んでいきましたが、正直どちらも行き詰まるだろう、とぼくは思っていました。事実そうになりましたし、いまは新しい世界の再編が始まっています。

そうした新しい世界で重要なのは、人びとが自発的に結んでいく組織体です。共産主義は本来、そういう社会編成と結びあっているんです。「ソビエト」は本来、協議会を意味し、ドイツ語では「ラート」（複数形は「レーテ」）と言います。

そういう協議会方式は、ナチズムのなかにも、ファシズムのなかにもありました。これは昔の社会主義ですが、どちらかとい

えばサンディカリズム（組合社会主義）の系譜です。社会思想の研究を通じて、そういった人々の自発的な結びつきに興味を持ち始めたんですね。だから、協同組合の実践からではなく、思想史の流れのなかから関心を持ち始めたわけです。

しかし、1980年代でしたが、生協の講演会で話をしてくれと言われて、戦後に起こった新しい社会主義の話をしたことが契機になって、コープこうべと関係ができました。その後、コープこうべの非常勤の理事をやってくれということになり、80年代の中頃に非常勤理事になってからはどっぷりコープこうべに浸かっていくことになりました（笑）。

【加賀美】 先生が戦後に社会思想を研究する過程で協同組合のあり方に注目されるようになったことがわかりました。

話は戻りますが、先生は当時、戦争に対してどのようなお考えだったのでしょうか。また時代の雰囲気はいかがだったのでしょうか。

【野尻】 戦前・戦中、ぼくはむしろ体制側でした。中学まではやってもらえましたから、大分の田舎ではわりと恵まれた家でしたけれど、当時の社会の貧しさは肌で感じていました。だから、そうした貧しいところから軍に進んだ当時の青年士官が、5.15事件や2.26事件を起こした気持ちはよくわかるんですね。あれは一種の階級闘争だと思います。そういう意味では、ぼくなどは当時の時代状況にすっかりはまっていた人間で、反戦や抵抗という気持ちは全然ありません。むしろ革命の闘士のような気になっていたんですから（笑）。

なので、日本の生命線と言われていた満州の建国大学に進んだときには、国土風な

思いもありました。現在では、満州は傀儡国家だったと言われていて、それについては色々と言いたいこともあります。そもそも満州についていまの日本人は知らないことが多すぎます。

たとえば、建国大学の設立には関東軍の石原莞爾が関わっています。建国大学は1938年に設立されましたが、その前年の37年に日中戦争の始まりとなった盧溝橋事件がありました。石原さんは学内講義で、「だいたい中国とけんかをするなんて狂気の沙汰だ。あれは狂人のやることだ」と話していました。石原莞爾は戦前の陸軍のイデオログのひとりですが、当時は戦争の拡大に真っ向から対立していたんです。

ほかにも、建国大学には日本人学生が3分の1ぐらいしかいませんでした。当時は「五族協和」を掲げており、建国大学にも日本人以外に、朝鮮人や漢民族、蒙古人がいましたし、革命で追われた白系ロシア人もたくさんいました。そのほかにも、台湾の原住民である高砂族や、漢民族とは異なる生粋の満州族も同級生にはいました。そうした多様な民族の学生がいたのは、単に満州だけでなく東亜全体を考え、大東亜共栄圏の指導者もつくるとというのが建国大学の基本精神だったからです。

石原莞爾以外の設立委員には、京大や東大の名誉教授といった人たちが入っていました。当時の副総長は京大の名誉教授だった作田壮一です。彼は河上肇の親友です。二人とも山口の出身で、国を憂える国士でした。つまり、河上肇も単なる左翼ではなく、国を憂えることが基本にあって、それが右へ行くか左へ行くか、それだけの違いだったとほくは思います。

しかも、建国大学の先生にはそうした人たちだけでなく、社会運動をやっていて、日本にいられなくなって大陸へ流れてきた

人たちもかなりいたのです。

こういった右から左まで、いろんな考え方の人たちが、学生を集めて自分の体験談や思想を話してくれたこと、色々な民族の学友と付き合った経験、これらがぼくの人生において大きな比重を占めてきたのは確かです。

【加賀美】 それでは、戦後、社会においてどのような部分が大きく変わったと感じていらっしゃいますか。

【野尻】 戦後日本の基本となった風潮は、戦前の共同体主義と精神主義に対して個人に重点を置く個人主義と物質主義の二つだと考えています。

後者の物質主義には、経済を優先する経済第一主義と、科学的真理だけを真理とする科学主義の2種類があります。戦後日本を支配してきたのは、そういう物質主義と個人主義だったと思います。これに僕はなじめなかったんですね。

ただ、戦後思想が戦前になかったいいものを付け加えたということは確かです。それはなにより人権思想です。人権思想を一挙に広めたことは、戦後思想の大きな功績だと思います。

それから、1960年代に奇跡とまでいわれた高度経済成長を実現したことです。もちろん、それだけの可能性が日本にあったことは事実です。戦争に負けたといっても、教育水準と技術水準は世界のトップに近いものだったからです。

しかし、個人主義と物質主義はマイナス面もあると思います。それは何かと言うと、ぼくは「唯権利主義」と言っていますが、人権が個人主義にとどまった点です。これは、個人主義だから、人権といっても義務や責任がほとんど問われず、権利の主張の

みになっているという意味です。こうした唯権利主義の立場に立つと、民主主義は保障の要求ばかりになってしまう。だから、日本の戦後の民主主義は要求ばかりする民主主義、すなわち要求民主主義になったと思います。いまもその傾向は多くて、何かあったら要求して、権利の保障ばかりを言う。ヨーロッパにも「要求民主主義」という同じ表現がありますが、ぼくはそういうことを言ってきました。

民主主義において人権に基づく権利が本来にあるのなら、義務や責任もあるはずです。そうすると、自分たちで出来ることは自分たちでやるという参画が出てきます。参画は一方的なものではなく、一緒にやることを意味しますから、単なる権利だけでなく、責任にも関わります。そうした点が軽視されたことが、戦後日本の民主主義のマイナス面だと思います。国の借金が国内総生産（GDP）の2倍超といったわが国の空前の財政赤字も結局は、そこからきたと私は見えています。

もうひとつ問題なのは、科学的真理だけが真理だという考え方、つまり目に見えるかたちで証明できなければ真理ではないという意味での物質主義です。

しかし、「科学的に証明できないから真理ではない」というのは、おかしい。証明できない、というだけの話です。最近、この点を非常に強調されるのが村上和雄教授です。筑波大学の名誉教授で、遺伝子研究ではノーベル賞クラスです。この方によれば、いま自分がここにいる確率を証明しようとする、1億円の宝くじに100万回連続当選する確率よりも小さくなるそうです。つまり、証明できない何かがあると考えなければならない、とも仰っています。そうした人智を超えた、「見えない世界」がある。その世界が、戦後は科学主義のた

めに消えたのです。

こうした世界が消えると、最終的に道徳が崩れてしまいます。というのも、道徳や倫理というのは、人が見ていようが見ていまいが、いいことはやる、悪いことはやらない、というのが第一原則だからです。子どもの頃、「人が見ていなくても、お天道様が見ている」とよく言われましたが、そうした人以外の視線は「見えない世界」のものです。つまり、「見えない世界」がなくなると、道徳的な頹廃につながりかねないのです。

これら二つが相重なって、結果、繰り返しになりますが、日本は権利主張の上に立った保障要求ばかりの要求民主主義になったのだと思います。

しかし、民主主義はそうした形ばかりではないのは、諸外国を見れば明らかです。たとえば、日本の賃金決定は、鉢巻きを締め、春闘をやってと、すべて闘争方式ですが、世界中でああいう形で賃金が決まると考えるのは間違いです。ドイツなんかはまったく違って、労働者側と資本家側がそれぞれ研究所を持ちます。ドイツでは、株主総会の上に監督役会があるからです。監督役会は、株主代表と労働者代表から成っていて、そこで賃金も決定されますがその際には、両方が徹底的に研究してくるんです。賃金をいくら上げたら、価格にどれぐらい跳ね返って、それが国際収支にどう響くか等を、それぞれの研究所で徹底的に研究して、数字でもって議論します。これをコンサート方式と言います。音楽のコンサートと同じように調子を合わせる協調方式ですから、限られた範囲ではありますが、労働者側も責任にかかわっていることになります。

これに対して、日本は階級闘争方式です。これは高度経済成長をもたらす社会的力学

にはなったと思います。経営者は、内部留保を削って賃金に回しますが、内部留保がなくなれば、絶えず事業を大きくするしか道はありません。国も同じで、保障ばかりやれば財政赤字になるから、経済成長を追求するしかない。そうして高度経済成長の力学が造り出されたわけです。

とはいえ、1980 年代の終わりには日本の高度経済成長が物理的に不可能になり、90 年代はほとんどゼロ成長の横ばいでした。そうすると、財政が赤字になるばかりです。だから、いまの日本の経済は「風前の灯」という感じです。アベノミクスと言っても、目の前の経済をちょっとよくするということで、長期的な見通しはほとんど見られない。日本の企業はほとんどが自転車操業になっている。これらも結局は要求民主主義からきているのではないでしょうかね。

【加賀美】 戦後は評価すべき部分もあるが、すべてがそうではないし、逆に戦前もそうである、というお考えですね。

【野尻】 もちろん、その時代にはその時代の主張がありますが、戦前のほくらの主張に対して、戦後は完全に背を向ける人とそうでない人間がいます。ほくらは後者に属するので、「戦前は全部悪かった」という感じはありません。「一億総懺悔」とは言ったけれども、懺悔していない部分もあるのです。たとえば、われわれが理想に掲げた「大東亜共栄圏」と同じようなことを、いま中国が掲げて、海のシルクロードと陸のシルクロードを一緒にした「一帯一路」構想を打ち出しています。日本が「大東亜」と言ったのと同じようなことを、中国も言っているわけですから、ほくには「なんであれが悪いんだ」という気持ちが非常にあるんですね。

建国大学の学友には、敗戦直後、自決した人間もいます。ほくはそこまでは行っていない。それほど戦前主義にどっぷりではないんだということですが、戦後の風潮にはどうしてもついていけなかった。戦後の風潮のいいところは伸ばすべきだけれども、悪いところもいっぱいあって、いま、その悪いところの歪みがそこここに出てきているんだと感じています。

【加賀美】 戦後社会の風潮から歪みが生じているとのことですが、そうした状況において協同組合にはどのような期待が持てるのでしょうか。

【野尻】 協同組合はとてもいい組織だと思います。英語の“cooperative”の“co”という接頭語はラテン語の“cum”から、“operative”はラテン語の“operor”には「働く」という意味と同時に「捧げる」という意味もあります。だから、“coop”というのは、ものすごくいい言葉だと思います。働き合い、捧げ合う。とてもいい言葉です。

法人を指す「コーポレーション」(corporation)とは全然違います。これは“co-op”ではなくラテン語の“corpus”から来ており、この“corpus”は「体」のことです。つまり、一体となっているという意味で、法人を指します。それとは違うので、欧米人はよく“co-op”と区切って発音します。いずれにしても、co-op の持つ働き合い、捧げ合うという意味あいは深く人間に理想的な姿だとほくは思っています。

協同組合はそういう組織だし、そうでなければならぬと思います。そして、実際、そうでしょう。みんなが協同で出資し、協同で管理し、協同で利用するわけです。出資、管理、利用、これもみんな一緒にやりましょうという、三位一体の民主主義です。

本来、民主主義に求められる要素をみんな持っているのだから、実際にも、そのように運営されないとおかしいのです。

そういう点では、戦前・戦中の国家主義ではありませんが、共同体主義の部分は現代でも重要だという思いが今でもぼくのなかにあり、それが私の生協の理念にもつながってきていると思います。

難波田先生の影響もあるのですが、あの方はヘーゲルの歴史哲学を展開されていました。ヘーゲルの歴史哲学では、原始的共同体（家族共同体）から始まって、やがて個人の解放が進み、個人主義的な「市民社会」となるが、この社会は結局は「欲望の体系」となり、再びその超克が求められてくることになります。

こうした否定の否定という「止揚」（アウフヘーベン）の考え方は、難波田先生の近代やわが国の戦後思想のご研究の基本にもありました。難波田先生はヘーゲリアンでしたから。その影響は僕にもあります。

そう考えると、今日わが国に求められるのは戦前の否定の否定、戦前とは異なる形で共同体を回復するということです。そうした共同体を回復する大きな道のひとつが協同組合だと思います。賀川豊彦先生の思想もそうですね。あの方は近代経済学とは対立している。先生の経済学はマルクス経済学です。しかし、社会改革運動の方式については、マルクスとまったく対立します。唯物論ではなく唯心論でした。心にかかわる教育がもっとも大切なものということになります。賀川先生が挙げられた協同組合の7原則の最後は「教育中心」です。それは生協の運営でも同じことだと思うんです。だから、生協の職員は絶えず勉強していなければいけない。それを抜きにして仕事をしたら、普通の店の雇い人と同じではないでしょうか。長い時間をとる必要はな

い。少しだけでも、その時々勉強する。少なくとも年に1回はそういう研修をやる。絶えず、そういう意識を持って取り組むことが重要で、そういうものを持っているかどうかで、たぶん組合員との接し方や組織の運営も変わると思います。そして、そうした取り組みをすることで、協同組合がその理念通りの民主主義を体現し、新しい共同体としての意味を持ってくるのではないのでしょうか。

【加賀美】 現代において求められている共同体やコミュニティといったものに対して、協同組合は大いに貢献できる可能性を持っているということですね。本日はどうもありがとうございました。

経歴

野尻武敏（のじりたけとし）

1924 年生まれ、大分県出身。

1949 年、神戸経済大学（現神戸大学）卒業。

1950 年から神戸大学経済学部、助手、講師、助教授、教授を歴任。

1988 年、神戸大学を定年退官、のち 2002 年まで大阪学院大学経済学部教授。

現在、神戸大学名誉教授、大阪学院大学名誉教授、

ひょうご震災記念 21 世紀研究機構顧問、

生活協同組合コープこうべ協同学苑学苑長。

経済学博士。

<専門分野> 経済政策論、比較経済体制論、高齢化問題、等